

高等教育における学生・教師の意識変化

瀧上 凱令*

神戸大学大学教育研究センター

Changes in Consciousness of Students and Teachers in Higher Education

Yoshinori Takigami **

Research Institute for Higher Education, Kobe University

Abstract From 1960 to 1996, advancement rates to universities and colleges increased from 10.3% to 46.2%. The rapid increase of university students has promoted the radical diversification of students. Although some students, needless to say, devote themselves to conduct their studies, majority of students give priority to the extracurricular activities, the part-time jobs, and the hobbies. Consequently it is no exaggeration to say that studying is not the main purpose for many students. To heighten their interests in academic works it is absolutely necessary for us to reconsider how we teach the students in higher education.

1. はじめに

最近, 大学において教育や教授法が大きな問題として取り上げられるようになった。その原因の一つは学問の高度化, 細分化であろう。これまで大学は学問研究の場であり, その研究を継承することが教育とされていた。しかし, 最近では学問研究の最先端は高度化し, 細分化した。そのためそれをそのまま学部段階の学生に伝えることは困難になっている。大学院生ではじめて理解できる水準になっているといえるであろう。最先端の研究をそのまま伝えることが教育であった幸運な時代は過ぎ去った。あるいはすでにはるか以前に過ぎ去ってしまっていたのかもしれない。多くの大学教員はそのことに気付きながらも, 現実的な対応ができずにいた。それが今あらためて取り上げられているということであるのかもしれない。

もう一つの, さらに大きな要因は進学率の上昇とともに学生の変化である。1960年代以降, 大学進

学者が急激に増加した。特に1960(昭和35)年から1975(昭和50)年の15年間の増加が著しく, この間に短期大学を含む大学入学者数は21万人から60万人に, 進学率は10.3%から37.8%になっている。その後増加にストップがかかったかにみえたが, 1980(昭和60)年代後半から再度上昇が始まり, 1996(平成8)年度の入学者は80万人で, 18歳人口173万人の46.2%に達した(文部省1997)。ちなみに戦前は, 高等専門学校等を含めた高等教育機関の学生の同世代人口に対する比率は, 明治期は1%以下, 大正期には1%から2%台, 昭和の戦前期には3%から5%程度であった(文部省1964; 市川1995)。

このため大学にはきわめて多様な動機と多様な資質を持った学生が入ってくるようになった。最近では大学進学希望者は高等学校卒業者の過半数(54%)に達しており, このことは必然的に進学動機に影響を及ぼしてくる。勉強したいから大学に進学する学生は当然いるであろう。しかし, 特別な目的もなくみんなが行くからということが入ってくる学生もいる

*) 連絡先: 657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1 神戸大学大学教育研究センター

**) Correspondence: Research Institute for Higher Education, Kobe University, Nadaku Tsurukabuto 1-2-1, Kobe 657-8501, JAPAN

であろうし、勉強をしたいわけではないが就職に有利という理由で入ってくる学生もいるであろう。また、高校全員入学に近い現状では、能力的にもきわめて多様な学生が入ってくる。大学のランキングとそれに伴う入学試験の難易によって、大学毎に見た場合はかなり均質な学生が入学しているかもしれない。しかし、大学間には大きな差がある。入試学力が能力の限られた部分しか測っていないとしても、その差はきわめて大きいといわざるをえない。

一般に学生の変化の原因は、大学への進学率が上昇したことによる学生の多様化に求められている。これは大学の大衆化と呼ばれている。しかし、大衆化は大学に特殊なことではなく、社会全体に見られる現象である。つまり、進学率を上昇させた社会経済的要因が社会そのものを大衆化し、それにともない大学生も大衆化したということがそれ以上に大きいのではないかということである。議論の根拠を明確にするためには明確な指標が必要であるが、大衆社会現象そのものを数量化することは難しいので、関連のある数量化可能な要因とそれらを通じての推量を含めて挙げれば次のようなものであろう。

すなわち、高度成長にともなう都市化の進行、テレビの普及にともなう大衆文化の出現と地方への拡散、都市中産階級の増大・中産階級意識の広がりなどがそれである(佐々木他 1991, 経済企画庁 1997)。これらが大衆社会を出現させるとともに大学進学率を上げ、大学生を普通の生活者にし、大学生を大衆文化の担い手であり顧客にした。

60年代の大学にはなお学生文化らしきものがあつた。学生の読む本は社会一般のそれとは少しは違っ

ていた。ミーハーとは違うんだという意識(それはエリート意識でもあるが)も少しはあつた。しかし、現在では大学生の読む雑誌やマンガ、大学生が聞く音楽、大学生が見るテレビのどこにも「大衆」との明確な差は指摘されていない。いつからかテレビのお笑い・バラエティ番組に大学生が出演するようになった。一方テレビタレントの何人かは大学に席を置いていたり、大学の卒業生であつたりする。ここには明確な境界は存在しなくなった。むしろ大学生が大衆そのものになってしまっているといえる。これが大学生の大学に対する態度や学問に対する考え方を大きく変えてしまった要因といえるであろう。

2. 学生の生活と意識

神戸大学では1977(昭和52)年以降1995(平成7)年までの間に「学生生活実態調査」を6回実施した(神戸大学 1977, 1980, 1983, 1986, 1990, 1995)。この結果を中心に、他大学等の調査結果も参考にしながら、大学や学問に対する学生の考え方を探る。

2.1 大学進学目的

表1は大学へ進学した目的・理由は何かをきいた結果である。6回の結果を比較しても大きな変動はない。しかし、大まかに全体を見ると、「将来に備えて専門的知識・技能を修得するため」が低下傾向にあり、「就職の際に有利だから」「誰もが大学に進学する時代だから」「クラブ・サークル活動やレジャーなど学生生活をエンジョイするため」が増加傾向にある。

表2は1995年度の結果を学部別にみたものであ

表1 大学へ進学した目的・理由

(複数回答)

調査年度	1977	1980	1983	1986	1990	1995
就職の際に有利だから	17.0	18.9	21.5	27.0	26.4	27.8
専門的知識・技能を修得するため	60.9	62.4	61.5	57.4	49.6	55.7
教養や視野を広げるため	49.3	46.3	46.8	49.2	49.7	48.4
誰もが大学に進学する時代だから	11.4	10.4	11.2	9.9	13.2	18.4
就職するのがいやだったから	14.3	11.7	10.2	9.0	11.2	10.8
親が大学進学を強く要望したから	3.1	2.5	2.0	2.3	2.5	3.9
先生や友人に勧められたから	0.5	0.2	0.3	0.2	0.5	0.7
学生生活をエンジョイするため	17.0	20.7	21.7	22.2	22.2	26.0
その他	4.1	3.4	3.9	2.7	2.6	1.9

る。これをみると学部間に大きな差があることが分かる。「専門的知識・技能を修得するため」は、医学部と教育学部がそれぞれ87.5%と73.1%で高い。ここには医師資格や教員資格を得るための基礎資格を得ることが含まれていると考えられる。ただし、教育学部は4年生のみなので、学部の特徴なのか、学年差なのか分からない。ここでとらえられているのは進学動機といわれるが、進学を決める時点でどう考えたかではなく、現在から見て大学進学をどう意味づけるかということであり、むしろ現在の意識をとらえていると見ることができるからである。一方、経済学部と文学部では「専門的知識・技能を修得するため」

が28.1%と34.2%と低い。また、「就職の際に有利だから」は経済学部が48.6%と高い。学部の違いを大まかに見れば、文学部・国際文化学部は教養指向、経済学部・経営学部は実利指向、理科系の学部は専門的知識・技能指向という傾向が認められる。

2.2 大学生生活の重点

表3は現在の生活の重点をきいた結果である。1995年度の結果をみると、「ほどほどに組み合わせた生活」がもっとも高く、「クラブ・サークル活動第一」や「豊かな人間関係を結ぶこと第一」がそれに続く。「勉強や研究を第一においた生活」は第4位というこ

表2 学部別に見た大学進学の目的・理由(1995年度)

(複数回答)

学部	文学	国際	発達	教育	法学	経済	経営	理学	医学	工学	農学
就職に有利だから	17.7	17.7	15.2	19.2	25.7	48.6	34.1	19.4	6.3	35.5	23.3
専門的知識・技能を	34.2	43.5	63.6	73.1	56.9	28.1	43.9	65.0	87.5	66.0	61.2
教養や視野を広げる	62.0	72.6	62.1	61.5	56.9	48.6	46.2	51.5	38.5	32.4	51.7
誰もが進学するから	12.7	12.9	16.7	23.1	23.9	19.9	23.1	18.4	10.4	17.6	19.8
就職するのがいや	29.1	11.3	4.5	0.0	7.3	11.6	10.4	12.6	7.3	10.7	8.6
親が強く要望した	5.1	1.6	1.5	3.8	1.8	3.4	5.8	3.9	5.2	3.4	5.2
先生や友人の勧め	1.3	0.0	0.0	0.0	0.9	1.4	0.6	2.9	0.0	0.4	0.0
エンジョイするため	27.8	32.3	21.2	15.4	19.3	31.5	30.6	18.4	4.0	26.7	25.9
その他	5.1	4.8	3.0	3.8	0.5	2.1	0.6	1.9	3.1	0.8	0.9

注. 国際文化学部、発達科学部は1993年度から学生を受け入れたため3年生まで、教育学部は1993年度から学生募集を停止したため4年生のみ

表3 学生生活の重点

調査年度	1983	1986	1990	1995	1995	
学年					1年生	2年以上
勉強や研究を第一においた生活	17.3	17.2	16.7	15.6	9.2	19.1
クラブ・サークルの活動を第一においた生活	19.9	17.2	19.4	21.7	25.2	19.9
自分の趣味を第一においた生活	8.5	9.3	8.7	9.5	8.5	10.0
良き友を得たり、豊かな人間関係を結ぶこと	17.0	20.3	19.8	15.7	19.5	13.6
資格取得や大学外の学校に通うこと第一の生活	2.2	2.5	2.2	2.7	1.4	3.4
アルバイトをしたり、お金をためること第一	2.0	2.3	2.0	3.2	3.7	2.9
特別に重点もなく、ほどほどに組み合わせた生活	23.6	24.0	24.4	23.7	22.4	24.4
何となく過ぎていく生活	5.7	4.9	4.9	6.8	9.2	5.4
その他	2.9	2.2	1.9	1.1	1.1	1.0

とであるが, 3位との差はない。4回の調査を通じて見ると, この4つの選択肢が若干の変動を含んで上位を分けていると見ることができる。

学部別(表4)では, 文科系の学部は「勉強第一」が少なく, 特に社会科学系の学部で「勉強第一」が少ない。それに比べて理科系の学部では「勉強第一」の比率がかなり高い。学年別のデータはないが, 理科系の学部の4年生ではこの比率はさらに高くなるものと思われる。

学年による違いについては, 神戸大学の調査結果は1年生と2年生以上にしか分けられていないが,

1年生にくらべて2年生以上の方が「勉強や研究第一」の率が高くなっている。また, 教育学部は「勉強や研究第一」と答えた学生は42.3%と高いが, これは学部差というよりは教育学部の調査対象が4年生のみなので学年差が表れたと見るべきであろう。

全国大学生協同組合連合会の調査結果(表5, 全国大学生協連1997)も全体傾向としては神戸大学の結果と違いはない。大都市と地方, 国立と私立に分けて集計されているが, 「勉強第一」が国立で高く, 「豊かな人間関係」が私立で高い。また, 学年による違いについては, 数字は挙げられていないが, グラフ

表4 学生生活の重点(1995年度 学部別)

学 部	文学	国際	発達	教育	法学	経済	経営	理学	医学	工学	農学
勉強第一	16.5	11.3	15.2	42.3	11.9	4.8	2.9	27.2	22.9	20.6	19.8
クラブ第一	21.5	24.2	33.3	15.4	22.0	26.0	25.4	16.5	9.4	19.8	23.3
趣味第一	17.7	9.7	6.1	3.8	6.4	8.2	11.6	14.6	6.3	8.4	8.6
豊かな人間関係	12.7	19.4	19.7	19.2	14.7	20.5	13.3	7.8	24.0	11.8	19.8
資格取得第一	3.8	1.6	0.0	0.0	8.3	1.4	5.2	3.9	3.1	0.4	0.9
バイト・貯金	5.1	4.8	0.0	0.0	3.7	4.8	4.6	3.9	2.1	2.7	0.0
ほどほど	15.2	19.4	22.7	15.4	29.4	21.9	26.0	19.4	25.0	27.9	20.7
何となく	6.3	3.2	3.0	3.8	3.7	12.3	8.7	6.8	6.3	6.9	5.2
その他	1.3	4.8	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7	0.0	1.0	1.5	0.9

注. 国際文化学部・発達科学部は3年まで、教育学部は4年のみ

表5 大学生生活での重点 大学生協連の全国調査の結果(全国大学生協連1997)

	86年	91年	96年	男子	女子	A	B	C	D
勉強第一	19.0	19.9	18.5	18.9	17.8	22.1	15.0	22.0	13.0
クラブ第一	14.0	14.1	13.4	14.3	12.0	14.7	14.4	10.8	13.0
趣味第一	13.1	13.8	12.9	15.7	8.6	11.7	14.9	12.0	11.8
豊かな人間関係	26.9	26.0	20.4	18.3	23.6	16.7	23.1	18.4	25.1
資格取得第一	2.9	3.0	3.7	3.5	4.0	2.6	4.7	3.0	4.8
バイト・貯金	1.9	2.6	3.3	3.2	3.4	1.8	4.1	3.3	4.1
ほどほど	14.6	15.3	20.5	18.0	24.3	23.2	16.6	23.1	20.1
何となく	5.0	3.5	5.0	5.6	4.1	5.1	4.4	5.5	5.8
その他	1.7	0.7	1.5	1.6	1.4	1.6	2.0	1.0	1.2
N・A	0.9	1.2	0.8	0.8	0.8	0.6	0.9	0.9	1.0

注. 1996年の調査 サンプル数77大学 35742人 回収数16067 回収率47.7%

A:大都市国立 B:大都市私立 C:地方国立 D:地方私立

から大まかな傾向を読むと、「勉強第一」は1年, 2年, 3年, 4年と学年が上がるにしたがって上がり, 4年生ではかなり高くなっている。

2.3 勉強時間

神戸大学の調査(神戸大学1995)は, 授業科目の予習・復習を何時間くらいしているかを問うもので, 授業以外の勉強時間はきいていない。予習・復習の時間は「していない」が58.9%, 「1時間程度」が30.1%である。北海道大学(北海道大学1997)では1日平均の自習時間をきいている。その結果, 30分以下が31.9%, 30分から1時間が22.5%である。一方, 2時間以上を合計すると19%になり, 4時間以上が5.3%いる。この結果から大学生は勉強しないということより, 勉強しない学生もいるが, 勉強する学生もあり, それは大学や学部や学年によって異なるということであろう。

総務庁の調査(総務庁1997)によれば, 小学4年以上の男子では, 学校段階が上がるほど「ほとんどしていない」の割合が高くなり, 男子大学生では45.1パーセントとなっている。女子では短大・高専・専修学校専門課程で「ほとんどしていない」が49.5%で最も高く, 大学・大学院は27.3%で高校生と同じ水準になる。この調査では勉強時間がもっとも多いのは中学生である。

2.4 サークル活動

生活の重点についての結果で明らかなように, クラブ・サークル活動中心の生活を送っている学生が

かなりいる。特に, 神戸大学ではその率が高い。クラブ・サークルに入っているかどうかでは, 入っている学生が70%にのぼる。過去に入っていた学生も入れると90%近くに達する。北海道大学(1997)では, 神戸大学より10%程度低い, それでも加入しているのが60%, 過去に入っていたのを含めると80%を超える。このようにサークル活動は現代の大学生活にとってなくてはならない重要な位置を占めている。

2.5 アルバイト

現代の大学生の生活のもう一つの重要項目はアルバイトである。神戸大学, 北海道大学, 全国大学生協連の調査は質問項目が異なるため, 比較は難しい。神戸大学では, 「アルバイトをしている」とこたえたのが74.2%, 北海道大学では「現在している」が60.7%, 「過去にしていた」をふくめると90.8%になる。大学生協連の調査では「現在している」が77.6%である。

注目に値するのがアルバイトの目的と種類である。アルバイトの目的(表6)は, 神戸大学では「レジャー費用をつくるため」が44.4%でトップになっている。これに「クラブ・サークル活動の費用をつくるため」13.4%を合わせると60%に近くなる。北海道大学では聞き方が違うが, 目的では「小遣・臨時の支出のため」が64.1%で, 使い道では「娯楽レジャー費」が38.3%でもっとも高い。学業を継続するためにアルバイトが必要としているのは両校とも2%程度にしか過ぎない。

もう一つ注目に値するのはアルバイトの職種の変

表6 アルバイトの目的・理由

調査年度	1980	1983	1986	1990	1995
学業の継続が困難なため	8.8	7.9	8.1	5.7	2.7
学業は継続できるが生活が苦しいため	35.5	37.7	34.8	26.7	18.4
レジャー費用をつくるため	36.5	36.9	43.4	44.4	44.4
必要としないが条件がよい	15.0	14.4	12.3	9.0	2.9
社会勉強のため	-	-	-	15.0	8.2
クラブ・サークル活動の費用をつくるため	-	-	-	13.5	13.4
高額商品の購入のため	-	-	-	-	4.8
全く必要としない	2.6	2.0	1.3	1.4	-

注. - は当該質問項目がなかったことを示す。

化である。従来は「家庭教師・塾の講師」といった大学生独自の職種が中心であったが、「販売・サービス」が急激に増加している。神戸大学で27.7%,北海道大学で17.0%にのぼる。大学生協連の調査は職種を細かく分けてあるが、まとめてみると私立の大学では販売・サービス関係が50%を越えている。この結果は大学生が普通の生活者になってきていることをはっきりと示しており興味深い。

3. 教員の意識

大学進学率の上昇にともなって大学教員も急激に増加した。平成8年度の大学教員数は、四年制大学で139,608人,短期大学20,294人,合計159,902人で,昭和25年の四年制11,137人,短大2,016人,合計13,153人と比べて,それぞれ12.5倍,10.1倍,12.2倍になっている(文部省1997)。このため大学教員も多様化した。また,大学生に影響を与えた大衆社会状況は大学教員にも当然影響を与えているであろう。

教育と研究のどちらに関心があるかについてはさまざまな調査がある。質問項目の違いがあり比較は難しいが,多くの調査を通じて教育よりも研究を重視するという傾向が見られる。諸外国との比較でも,日本の大学教員は教育よりも研究に対する関心が高いという結果が得られている(有本・江原1996)。

4. 結び

日本の大学生が学問離れを起こしている,あるいは勉強しなくなったといわれている。大学はレジャーランド化したともいわれる。ここに取り上げた結果からは,確かに多くの学生が勉強をするよりもキャンパス生活を楽しんでいるという様子が見える。しかし一方では勉強第一の生活をしている学生もいる。その意味では学生が多様化したということであろう。勉強に関心のある学生や勉強の必要な学生は勉強しており,勉強がそれほど必要でない学生はほどほどに勉強をしており,勉強に関心もなく必要もない学生もいる。

神戸大学の調査では,社会科学系の学部の学生が勉強からもっとも遠い。これらの学部の卒業生の多くは民間企業等に就職する。就職には学業成績は問われない。むしろ運動クラブに所属していたというキャリアの方が重視されるという風評すらある。学

生がそういう社会にうまく適応しているとみられることもできる。

しかしながら,大学は教育機関である。教育機関である限り,1人でも多くの学生に勉強をさせる必要がある。そのためにどうすればよいのか。出席を厳しくし,課題や予習義務を課すという方法も考えられる。しかしそれには学生の反対が多いというデータもある(苅谷1995)。自然の中の恵まれた静かな環境の中で勉学に専念するというイメージが今でも生きている。学生が勉学以外に注意を向けないようにということで,こんなイメージをもとに作られた大学があるかもしれない。しかし,学生がそんな大学を喜んで選択するとは考えにくい。学生の多くは都会志向である。学生の多くは娯楽やレジャーなどを重視している。そして,その資金を稼ぐためのアルバイトの場も不可欠と考えている。

こんな現状の中で学生に勉強させる法を考えるのは難しい。しかしとりあえずいえることは,学生の学問に対する興味や関心を引き出す授業の必要性であろう。そしてそのためには,まず大学教員の教育に対する関心を高める必要がある。

参考文献

- 有本章・江原武一編著(1996),『大学教授職の国際比較』玉川大学出版部
- 北海道大学学務部(1997),『学生生活実態調査報告書1996年版』北海道大学
- 市川昭午編(1995),『大学大衆化の構造』玉川大学出版部
- 苅谷剛彦(1995),「変貌するキャンパス - 「学問」なき大学の迷走 - 」苅谷剛彦編『キャンパスは変わる』玉川大学出版部
- 経済企画庁国民生活局編(1997),『国民の意識とニーズ - 平成8年度国民生活選好度調査 - 』大蔵省印刷局
- 神戸大学(1977,1980,1983,1986,1990,1995),『学生生活実態調査報告書』神戸大学
- 文部省(1964),『わが国の高等教育 - 戦後における高等教育の歩み - 』大蔵省印刷局
- 文部省(1997),『文部統計要覧 平成9年版』大蔵省印刷局
- 佐々木毅ほか編(1991),『戦後史大事典』三省堂

総務庁青少年対策本部(1997)『日本の青少年の生活と意識 - 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書 - 』大蔵省印刷局

全国大学生協連事業企画室編(1997)『第32回学生の消費生活に関する実態調査報告書』全国大学生協同組合連合会